

論文要旨

フランスと西アフリカ：  
フランコフォニーを争点にして

2007年10月 提出

指導教官 糟谷啓介教授

一橋大学大学院 言語社会研究科

LD 040012

鳥羽 美鈴

## 序章、導入部

英語が世界語としてヨーロッパ諸機関を始めとする地域組織や国際組織のなかで伸びをみせるなか、フランス語の使用率は年々減少の傾向にある。それに対してフランス語の保護政策を積極的に進めてきたフランスは、こうした現状を危惧し、アメリカ中心のグローバルゼーション、あるいは「英語帝国主義」を打破するものとして、フランコフォニーを位置付けようとしている。

では「フランコフォニー」とは何を指すのか。これは英語圏、スペイン語圏、ポルトガル語圏などと並ぶ一つの言語共同体とみなされて、「フランス語圏」と翻訳されることが多いが、フランス語の言語共同体の枠組みに収まるものではない。その成立過程を追うことで、フランコフォニーはむしろフランス語がもつ精神や価値観を共有する精神的共同体、そして政治組織であることが明らかになる。

また、「フランコフォニー」は、近年、オブザーバー国を含め68メンバーを抱えるフランコフォニー・サミット加盟諸国・地域とその政府によって構成される国際組織を指すが、メンバー諸国・地域が必ずしもフランス語を公用語としているわけではない。さらに、フランス語を公用語としている国のほとんどは多言語国家である。この結果、他の言語圏に比してフランコフォニーでフランス語の優位性は低く、フランコフォニー成立の問題は言語多様性の問題であることが分かる。

独立を果たした旧フランス領アフリカ諸国から、組織設立の足がけとなる連合の話を持ちかけられた当初、フランスは、「新植民地主義」とであると批判されるのを危惧し、これに積極的に関与することはなかった。それが、フランコフォニーメンバーの中でも最大の出資国としてフランスが関与するようになったことは、フランコフォニーを新植民地主義の体現であり、旧植民地諸国への影響力の維持を図るものといった批判を絶えず招いている。

しかし、東欧諸国や旧フランス領ではないアフリカ諸国をも含むまでに拡大したこの組織は単なるフランスの「帝國的意志」の体現ではないし、フランコフォニーの理念はフランス語の優位を守ることではない。フランコフォニーが支持するのは「多様な言語・文化の共生」である。その活動は実に多方面にわたり、フランス語の普及や擁護に留まらず、パートナーとみなされる諸言語の擁護、さらには多様性の強化といった文化面の活動のみならず世界の貧困や危機に挑むなど経済的・政治的支援にも及ぶ。

それに呼応するように、メンバーの加盟動機もまた多様である。経済目的、政治目的、文化目的と大きく3つのカテゴリーを設けて、その面へのニーズが特に強く現れている地域を取上げたが、西アフリカの場合は、経済的支援の享受のほかに、フランス・アフリカ間の関係強化のみならず、アフリカ南北間の連帯をも求めてフランコフォニーに接近したと考えられる。政治目的の項にはヨーロッパ回帰の志向をもつ諸国の例を挙げ、文化目的の項では、諸国・地域のアイデンティティの承認を問題とした。

フランコフォニーはその活動のなかで、英語を中核とするコモンウェルスやポルトガル語諸国共同体といった他の言語圏とも対立することなく良好な連帯関係を保っている。フ

ランコフォニーメンバー諸国は様々な国際組織や地域組織の代表国でもあるが、国連、アフリカ連合、アフリカ・カリブ海・太平洋諸国グループなどと協定を結び、EUとも連携している。

## 第一部

ランコフォニーを対外政策の一環として位置付けるフランスにおける対内政策との一貫性の有無を検討したが、そこには明らかな矛盾と共に、ランコフォニーとフランスが理念として掲げる多様性に食い違いが見られた。なぜなら、フランスは国内の文化的多様性には一定の理解を示しながらも、それを公式に承認することを拒絶している。

例えば、フランスの一部地域で用いられる地域語の公的使用を認めない、あるいはムスリム移民の女子学生が髪を隠すために装着するスカーフを学校で禁止する法律を制定するなどの動きである。さらに、欧州審議会が「欧州地域少数言語憲章」を採択してから7年後になってようやく署名に至ったものの、憲章にフランス共和国の土台をなす共和主義原理そのものに対する脅威を抱くフランスは、いまだに批准していない。

つまりフランスが掲げる多様性とは、国民国家の単一不可分性を前提としたものである。それに対してフランスは、海外、特にフランス語圏諸国、ヨーロッパ諸国に向けて、多様性や多文化主義については「少数言語」であるフランス語を守り、あるいは教育を積極的に行うよう呼びかけている。しかしランコフォニーの理念は参加国の言語多様性を尊重することであって、フランス語の優位を守ることだけではない。

他方で、パリ郊外の公立中学校訪問による教育現場の視察と学校長へのインタビューから以下のことが明らかになった。まず、単一不可分性と並んでフランス共和主義理念に欠かせない要素といえるライセンス原則は、近年いわゆる「スカーフ禁止法」として公立学校に適用されたが、現場で排除ではなくより多くの生徒を受容するものとして解釈されることである。次に、イスラームの宗教祭日の休暇申請や食堂のメニューに見られる特別措置の存在である。それは、ライクな学校における生徒の文化的・言語的多様性の容認という側面を示すものと言える。

「共和制モデル」と言われるものも欧州統合や分権化・地域化の進展に伴って、変容を見せ始めている。単一的だった「公共領域」が、地域語使用が認められる教育やメディアの場と、フランス語の使用が義務づけられたままである行政機関などに二分化される傾向が見られるようになってきた。こうした地域語使用域の拡大は、今後フランスが欧州地域少数言語憲章の批准へと向かう可能性を示唆する。

このように変容を見せる共和国理念が今後どのような形で国内の地域語や移民問題に対処していくのか注目されるが、ランコフォニーが多様な文化間の対話と交流の原理となるためには、「多言語・多文化主義」の哲学がそこに貫かれていなければならない。すなわちフランスは多様性を謳うランコフォニーを支持する姿勢に信憑性を持たせて他国との連帯を強化するためにも、国内政策と国外政策の間に見られる矛盾を解消する必要がある。

## 第二部、結論

西アフリカには、フランスが二国間援助において長年重視してきた旧フランス植民地諸国が位置している。多くの地域でフランス語話者は少数派であり、西洋のフランス語圏諸国では出生率が低下しているのに対して、フランス語圏西アフリカ諸国を包括するブラック・アフリカにおいては人口と就学率の増加とが今後も見込まれるために、西アフリカは、今後のフランコフォニー拡大の鍵ともなる。アフリカはまた、フランコフォニーの重要な理念である多言語・多文化の共生を考える上で、最適な環境を備えている。そこには、幾多の民族や言語が国境線を越えて共存しているからである。

では、新植民地主義からの解放とグローバル社会への参与を願うアフリカは、どのようにフランコフォニーに関与しているのだろうか。本稿ではフランコフォニーとフランスとなかでも密接な関係をもつセネガルとコートジボワールに焦点を当ててこの問題を考察した。セネガルは、フランコフォニーの創設者の一人でありフランス語擁護者ともいえる故サンゴールと現フランコフォニー事務総長ジュフを擁するのに対して、コートジボワールは、フランス語圏西アフリカ諸国のうち、最多の人口とフランス語話者を数える。

また、旧フランス領の作家たちの旧宗主国の言語使用に対する心的態度を明らかにした。それは端的に言って、アイデンティティの喪失、母語と母国への裏切りという思いと共に、旧宗主国の言語であるフランス語を職業として使用する自己内面にある葛藤と矛盾を乗り越えようとする態度である。ここで、より多くの作家たちがフランス語使用を支持する在り方を考えてみると、それは「フランスのフランス語」の中心性を排除すると同時に、フランス語内の複数性を容認することにあるのが分かる。

フランコフォニーの原点となるサンゴールの文化思想のなかでも、言語・文化的多様性の擁護とこれを支える諸国・地域間、諸組織間の連帯は欠かせない要素であり、アフリカ出身のフランコフォニー前事務総長と現総長によってこの理念は引き継がれている。

しかしながら、西アフリカ諸国に対しては、とりわけフランスという一国が二国間援助とは別に、経済面から文化面に渡って大きな影響力を行使しており、両者の間にはパートナーシップと呼ぶには程遠い不均衡な関係が見受けられる。

今後、フランコフォニーの経済面において最大の争点となるのは、フランコフォニーメンバー間の格差の解消であり、そのためには従来の諸国関係に捕われることなくフランコフォニー諸国間においてさらに連帯の輪を広げるとともに、各メンバーの主体性を高めていくことが必要である。そして、フランコフォニー空間において、フランスとアフリカ諸国という関係に一極化するのを避けるためにも必要となるのは、北の国の連帯強化である。

本稿で言語政策や教授言語の点などから検討した言語的側面から言えば、フランス語はフランスの占有物でないのみならず、コミュニケーションの道具である英語と対置されるような唯一の文化の運搬物でもない。現在フランス語が旧フランス領で担う一つの機能として、フランス語もまた、伝達手段としての、いわば単なる「道具」という位置付けが可

能である。

従って、言語間のヒエラルキーを完全に振り払い、フランス語と諸言語が真の「補完性」の上に立つように努力する必要がある。これに加えて、西アフリカにフランスとは異なるフランス語が存在することを認識した上で、フランス語の変種間の階層をも取り払わなければならない。フランコフォニーの将来はまさにここに掛かっている。ここで、フランスが取る姿勢は、フランスと旧フランス領アフリカ諸国間との連帯を成功させるかどうか、そしてフランコフォニーという連帯を国際舞台で活かせるかどうかという問題を左右する重要性をもつ。